

# Othello における愛と社会

細川 眞

## Love and Society in *Othello*

Makoto HOSOKAWA

論文要旨 *Othello*は、Shakespeareの「愛の悲劇」の中では、理想の愛と現実の愛を交錯させている点で特異な作品と言える。*Othello*とDesdemonaの理想的な愛は反社会的であって、それを成就するにはDesdemonaのように社会を断念せざるをえない。しかし、放浪の武人Othelloは愛を契機に社会に入ろうとし、醜い現実に蝕まれ、不幸にも理想の愛を破壊してしまう。本稿では、反社会的な愛を社会と調和させようとして失敗したOthelloの悲劇性を解明していく。

### I

D. Wilsonは、彼の名著 *The Essential Shakespeare* の中で、“As Shakespeare’s tragic imagination deepened, it came to dwell less and less upon faults of character and more and more upon the forces of evil in the universe”<sup>1</sup>と云って、その傾向が最もおし進められた作品が *King Lear* であると見ている。このD. Wilsonの指摘は、Shakespeareの悲劇（特に四大悲劇）を個々にでなく、一つの大きな連続体として見る場合に非常に示唆的であるように思える。というのも、この小論で扱う *Othello* (1602) は、四大悲劇の中では *King Lear* (1605-6) の前に書かれた作品であるにもかかわらず、ややもすると *King Lear* のような宇宙的ヴィジョンのない、また全く *King Lear* とは次元が異なる局所的な家庭悲劇としてみなされる傾向が強いからである。と云って、拙論で *Othello* の宇宙性をうたうつもりはない。*Othello* には、アレゴリカルな解釈は別にして、やはり *King Lear* のような宇宙的ヴィジョンはないのである。だが *Othello* には、*King Lear* で問題にされている深遠なテーマが内包されているのは事実であり、*Othello* では表面にでないけれども、*King Lear* で深刻化する「世界の悪」というテーマが志向されていることには間違いないように思われる。*King Lear* が陽画だとすれば、*Othello* はその陰画であると言ってもよいであろう。そこで、この *Othello* 論ではそのような発展を念頭におきながら、*Othello* における愛と社会の関係に焦点をしぼり、*Othello* の悲劇性を明らかにしていきたい。

### II

*Othello* と Desdemona の愛をみる時に、先ず次の事に注目すべきである。それは、愛を契機に *Othello* は社

会の中に入ろうとするが、Desdemona の方は、逆に、社会の外に出ようとするのである。

Oth. But that I love the gentle Desdemona,  
I would not my unhoused free condition  
put into circumscription and confine  
For the sea’s worth. (1.2.25-28)

ここで明らかのように、それまで諸国を放浪し、社会という“circumscription and confine”に束縛されたことがなかった自由な身の上のOthelloが、Desdemonaを愛したことにより、社会の一員になろうと決意することになる。かつてのOthelloは、七才の時から戦場を渡り歩き、ある時は、囚れの身となって奴隷に売られたり、またある時は、食人種の国に旅をするという具合に、冒険的で波乱万丈の生活を送っていて、いわば中世の騎士像を思起こせる武人であった。A. C. Bradleyが言っているように、彼は、我々の世界に属さない「不思議の国」からやってきたような、ロマンティックな人間なのであった。

Othello is … by far the most romantic figure among Shakespeare’s heroes. … He does not belong to our world, and he seems to enter it we know not whence — almost as if from wonderland.<sup>2</sup>

ロマンスの世界には恋はつきものだから、Desdemonaの獲得は、ロマンスという観点から見た場合、艱難辛苦を経た騎士“Othello”を最後に華々しく飾る栄光であったはずであった。

……he comes to have his life crowned with the final glory of love, a love as strange, adventurous and romantic as any passage of his eventful history.<sup>3</sup>

*Othello* と Desdemona の周辺には、ロマンスの世界の

雰囲気は漂っていて、ロマンスならば、Othello が Desdemona の愛を得た時点で完結なのである。しかし、この「ロマンス」の完結が、Othello では「悲劇」の幕開けとなる。その原因は、誰もが指摘するように Iago の存在であるのは間違いないが、それ以上に重要なのは、今述べた Othello の社会に入ろうとする意識なのではないかと思われる。

Othello は、Desdemona との愛によって社会に定住することを覚悟し、以後社会の枠内で物事を見るようになるが、市民社会の一員になるにはこれは当然の事で間違っていない。ただ彼の不幸は、彼の考えていた社会像が現実の社会像と一致せずに幻想であった点にある。しかも彼は愛をこの幻想の社会の枠内でとらえようとしてしまった。純粋な愛は、社会の倫理、規範から逸脱するのが常であるのに（その典型は Romeo と Juliet である）、彼は愛というものは社会的に正当性をもつべきだと考え、自分の場合は、社会における愛の倫理に当てはまるとの誤解をするのである。

Oth. My services which I have done the signiory  
 Shall out-tongue his complaints. 'Tis yet to know—  
 Which, when I know that boasting is an honour,  
 I shall promulgate—I fetch my life and being  
 From men of royal siege; and my demerits  
 May speak unbosomed to as proud a fortune  
 As this that I have reached. (1. 2. 18-24)  
 My parts, my title, and my perfect soul,  
 Shall manifest me rightly. (Ibid. 31-32)

Desdemona は、Venice では家柄の良い貴族の娘であるから、その愛、結婚の相手としては、身分、地位、能力等がそれに釣合った者でなければならないと、彼は考えたのだろう。そこで自分を見てみると、王族の出であるとし、国家に功績を尽したし、Venice 軍を率いる武将でもある、従って社会が愛に要求する条件を十分満たしている、と判断をした。しかしながら不幸にも彼の考えた条件と、現実の Venice の社会が愛に求める条件とは違っていたのである。

Venice の社会から二人の愛を見た場合、それは、第一に結婚は親の許しを得るべきという社会的倫理があるのに、Desdemona はこの掟を破った点で反社会的な愛である、第二には父 Brabantio が言うように、年齢も膚の色も違うススのように黒いムーア人と白い Venice 娘が愛に落ち入るのは、何にもまして反自然で異常な事件であるのである。

Bra. ……and she—in spite of nature,

Of years, of country, credit, everything—  
 To fall in love with what she feared to  
 look on!  
 It is a judgement maimed and most  
 imperfect  
 That will confess perfection so could err  
 Against all rules of nature…(1. 3. 96-101)

Brabantio が考えたように、社会が二人の愛を判断するとすれば、Othello は魔法を使って、Desdemona をたぶらかしたとしか思えないのだ。確かに Venice 公をはじめ元老院は、二人の結婚を祝福しているから、Venice の社会全体が二人の愛を否定しているのではない、また Othello が考えた社会における愛の基準と現実社会のそれとは異なっていない、という反論があるかもしれないが、野島秀勝氏が言うように、「ヴェニススの元老院がデズデモナとの結婚を許したのは、彼らが人種の偏見からまぬがれていたがためではないし、オセローの過去の功労を認めたがためでもない、トルコ軍の侵入という切迫した現実政治がオセローの武力を必要としていたからにすぎない」<sup>4</sup> のである。Othello は Venice では単なる傭兵隊長でしかなく、彼は誤解しているが、確固とした社会の市民権は得ていないのであって、彼がいかに社会的になろうとしても、社会の方は、彼を非社会的な黒い渡り鳥のようにはしか見ず、差別的であることをやめはしない。Bradley は、

… in the beginning of the seventeenth century, it would be something monstrous to conceive this beautiful Venetian girl falling in love with a veritable negro.<sup>5</sup>

と、明らかに当時は黒人に対する差別意識があり、白人と黒人の恋愛は奇怪にみえたであろうと言っている。

この点、Desdemona の方が客観情勢はよくわかっている。先に述べた通り、彼女は愛によって社会を出ようとするのである。つまり彼女は、社会が愛に強要する外的条件—身分、階級、人種等—愛の社会的モラルを一切無視して、心と心の結びつきという本来の愛の本質だけを重んじた。社会の人々が Othello の顔（黒）を彼の心（従って黒）と差別意識で見たのに対し、彼女は彼の心（白）が彼の本当の顔（つまり白）だと言う（I saw Othello's visage in his mind. 1. 3. 252）。これが結果的には社会を逸脱している行為ということになり、彼女は愛を通して社会に背を向けることになるのであるが、彼女は自分の行動が反社会的、反自然であることを十分認識し、社会から拒絶されることをも十分覚悟しているのであって、Othello のように社会が二人を祝福してくれるという甘い期待はもっていない。

Des. That I did love the Moor to love with him,

*My downright violence and scorn of fortunes  
May trumpet to the world. (1. 3. 248-50イ  
タリックス筆者)*

Samuel Johnson が指摘しているように、“violence”は ‘violence acted’ (i. e. breach of common rules and obligations)<sup>6</sup> であって、彼女は社会に対する自分の罪がわかっているし、そのために自分が受ける苛酷な運命にも覚悟済みなのだ。この現実認識が Othello との決定的な差であって、Cyprus に赴く時、Othello は

Oth. Most humbly therefore bending to your  
state,  
I crave fit disposition for my wife,  
Due reference of place and exhibition,  
With such accommodation and besort  
As levels with her breeding. (Ibid. 235-39)

と、社会が当然後に残す妻を優遇してくれるものとの期待を持つのに対し、彼女は自らの反社会性を承知しているから社会を当にせず、逆に、戦場の Cyprus に同行させて欲しいと頼み込んで社会を捨てようとする。勿論この訴えは、単に対社会的考慮から生じただけのものではなく、愛する夫と共に暮らしたいという積極的な意図によるのは言うまでもないが、いずれにしろ、彼女には Othello だけがすべてなのだ。

Des. ……………if I be left behind,  
A moth of peace, and he go to the war,  
The rights for why I love him are bereft  
me,  
And I a heavy interim shall support  
By his dear absence. (1. 3. 255-59)

元々 Desdemona は、Othello の騎士道的姿、冒険的生活に心が引かれて彼を愛するようになり (She loved me for the dangers I had passed. Ibid. 167), その結果 Othello が反社会的な存在ということで、父も友も社会も捨てざるを得なくなったのである。

Emil. Hath she forsook so many noble matches,  
Her father, and her country, and her  
friends,  
To be called whore? (4. 2. 126-28)

このように、Desdemona は愛のために社会からの離反という代償を払ったのに対して、Othello の方は、愛のために Desdemona の憧れた冒険的生活を犠牲にして小市民的になろうとしてしまったのである。しかも現実の社会の実態を知らずして、これを観点を変えて言えば、Desdemona は愛にすべてを賭けたが、Othello は愛と社会を妥協させようとしたと言えよう。といってこの事は、Desdemona に対する Othello の愛が彼に対する Desdemona の愛よりも弱いということの意味しな

い。彼にとって Desdemona の存在は、“when I love thee not/Chaos is come again” (3. 3. 92-93) というように宇宙秩序の中心であったし、彼の生命の源でもあった (The fountain from the which my current runs,/Or else dries up—4. 2. 60-61)。ただ彼は Desdemona と違って愛に溺れることなく、そこは大人の理性が、社会を意識し社会と愛の調和を計ろうとしたのであって、その顕著な例は、Desdemona を Cyprus に連れて行く場合にかがわれる。彼は妻をつれてゆくことにつけて、

Oth. And heaven defend your good souls that  
you think  
I will your serious and great business scant  
For she is with me. No, when light-winged  
toys  
Of feathered Cupid seel with wanton  
dullness  
My speculative and officed instruments,  
That my disports corrupt and taint my  
business,  
Let housewives make a skillet of my helm,  
And all indign and base adversities  
Make head against my estimation! (1. 3.  
266-74)

と、誤解をされるのを恐れるかのように先走って、仕事と愛を混同しないとわざわざ弁明している。Antony と Cleopatra の破滅は、両者が愛にすべてを賭け社会、仕事を犠牲にしたためだと言えるとすれば、Othello の場合は、逆に、社会の枠内に愛を据え、愛と社会の調和を保とうとしたために破滅していくことになると言えよう。

### III

Othello は Desdemona と結ばれるまで、社会生活を一度も経験したことがないので無理もないことであるが、彼はあまりにも社会に期待し過ぎたのである。彼は、人間は appearance と reality が一致しているものと思ひ込み、Iago のように裏と表が異なる人間がいるとは夢想だにしなかった。Lear が自分の国はまだ中世的秩序が美しく保たれているとの幻想を持ったように、Othello も Venice の社会がそうであるとの幻想を抱いていたのである。ところが現実の Venice の社会は不正が横行し、中世的秩序は無視され、人々は欲望で動き回っているのが実情であった。

Iago. Preferment goes by letter and affection,  
And not by old gradation, where each  
second  
Stood heir to th'first. (1. 1. 36-38)

このように社会的地位は依怙輩員や推薦状によって左右

され、中世的ヒエラルキーは無視されて、力もない者が外見だけで登用されている。Iago が副官の地位を得られなかったことによって Cassio に抱いている恨みは、この社会の実情とは無関係でなくて、それなりの正当性をもっていると考えるべきだろう。というのも Cassio は “arithmetician” にすぎなくて、

Iago. One Michael Cassio……

That never set a squardon in the field,  
Nor the division of a battle knows  
More than a spinster………

………mere prattle without practice

Is all his soldiership. (1. 1. 20-27)

というように、全く実戦経験のない外見だけ立派な武人であり、その彼が副官に任命される始末なのである。Iago が Cassio よりも副官にふさわしい人物であったかどうかは別にして、Cassio も appearance と reality の異なる、腐敗した Venice の社会の一員であることは間違いない。Cassio という男は一見 Iago の犠牲者のように見えるが、劇全体を通して評価すれば、全く我々の同情をひかないつまらない男である。自らも認めているように極度に飲酒癖が悪いし、軽薄に当世風の身のこなし方を自慢し、とりわけ、この劇のテーマとも関係するが、Bianca という Cyprus の娼婦を弄んだりする墮落した男でもある。Othello の入ってゆこうとした「社会」は、このような人々の住んでいるところであったのだ。

#### IV

ところで、Iago は Othello を破滅させるために Desdemona と Cassio が不義を犯したという嘘を捏造するが、その手段として Othello の社会的無知を利用する。このやり方は、Othello の方も常に社会を意識している状態になっていたために全く効果的であった。劇の見所である誘惑の場は、このような視点から見れば非常に単純な劇構造になり、無知な Othello の愚かさだけが目立つということになるが、しかしながら我々は、Shakespeare は常に一ひねりも二ひねりもする劇作家であることを忘れてはなるまい。誰もが誘惑の場において明白にみてとれるのは、Iago が Desdemona の虚像を造り上げ、それを Othello が信用して 真実と嘘を取り違えるという点であるが、この場の劇構造は重層的であり、この場は更に今一つのアイロニカルな意味を持っていることに注目すべきであろう。それは逆説的な言い方になるが、Iago の吐く嘘は真実である、ということである。

勿論 Desdemona と Cassio が、本当に不義を犯していたという意味ではない。何が真実であるかと言えば、Iago にはその意図は全くないのに、彼は Desdemona に対する嘘を通して社会の愛の現実（醜さ、頹廃）を

Othello に教えてしまうという点である。Iago は Shakespeare の手を離れて一人歩きをし、劇の演出家のようにすべてを支配しているというようなことがよく言われるが、何のことはない、Shakespeare は Iago を見事に操って、劇の主題を展開する片棒を担がせているだけのことである。その主題は *King Lear* の主題と言った方がより当を得ているが、社会の悪、世界、宇宙の悪という壮大な世界認識なのである。

勿論誘惑の場は、Iago が Othello を操り Desdemona の虚像を信じ込ませていく過程が中心をなしているのは言うまでもない。この過程は言葉を換えて言えば、Othello が段々と Venice という墮落社会の中に入り込み、その邪悪さに同化されていくという事を意味していると思われるが、この Othello の邪悪化の道は後述するとして、最初にこれまであまり注目されなかったアイロニカルな意味の方、つまり Othello の世界認識への道を述べてみたい。もっともこの点は、*King Lear* で Shakespeare が真正面から取り組む問題であって、Othello では十分に展開されていない嫌いはあるが、

劇のこうした一面に注目する時、劇における Iago の役割というものが少しははっきりと見えてくる。Iago に対するこれまでの評価は様々で、Bradley は彼を “artist”<sup>7</sup> と呼び、Coleridge は Iago の行動の中に有名な “the motive-hunting of motiveless malignity”<sup>8</sup> を見た。また F. R. Leavis は “he is not much more than a necessary piece of dramatic mechanism”<sup>9</sup> と主張した。いずれの解釈も幾分の真実を含んでいるが、ここでは彼が *King Lear* の Fool に似た一面を持っている事を指摘したい。周知のように、*King Lear* における Fool は常に Lear の側にいて、現実を知らない Lear に世の残酷さ無情を教え続け、社会に対して甘い幻想を持っていた Lear の目を覚醒させる役割を果たすが、Iago が Fool に似ている点はこの教育という点である。というのも Othello も Lear のように Venice の真の姿を知らず、社会に甘い幻想を持っているからである。とはいっても Iago は Fool と違って、自ら意図して Othello の教育者になっているのではない。彼の目的は、あくまで Desdemona の虚像を Othello に信じ込ませることだけにあったのであるから、その意図は、いわば Shakespeare のものと言えよう。おそらく Shakespeare は、Iago を appearance と reality のくい違う現実社会の象徴にすると共に、少くとも二重の人物像を彼に投影している。一つは悪への誘惑者 (Vice) のそれであり、今一つは *King Lear* の Fool 像だ。しかもこの両像は、演劇の歴史からみて全然矛盾するものではなく同家系なのである。高橋康也氏は、エリザベス朝演劇の道化の祖先は道徳劇の「悪徳」(ヴァイス) である。<sup>10</sup>と

指摘しておられるが、周知のようにViceは“Mankind”を墮地獄へと誘う誘惑者であって、Iagoにはこの面影が明らかに見られる。それに“Vice”が“Fool”の祖先なら、Iagoが“Fool”の一面をもって何ら不思議でもなくなる。W. Empsonなどは彼の中に“the Clown in Revolt”像を認めているのであって、<sup>11</sup> *King Lear*のFoolのように人を教育する役割の道化もいることもまた事実であるから、*Othello*と*King Lear*の時代的、主題的類似性を思えば、ShakespeareがIagoにこっそりとFoolの面影を与えたとしても十分合点がいく。タイプで言えばIagoは、いわばViceからFoolへの過渡期の人物だと言えるのではないだろうか。

そこで具体的に誘惑の過程におけるIagoの意図しない教育効果のみていくが、彼が行う暴露はすべて愛の腐敗、醜悪さという一種の社会悪に集中されている。

Iago. I know our country disposition well;  
In Venice they do let heaven see the  
pranks  
They dare not show their husbands; their  
best conscience  
Is not to leave't undone but keep't  
unknown. (3. 3. 203-06)

ここでIagoは、DesdemonaがOthelloに隠れて不貞をはたらく女であることを暗示するために、その例証として、Veniceの女はappearanceとrealityが違って性的に墮落しているという現実をもちだしているだけなのだが、Othelloの方は社会の現実をまだ知らないから、この言葉より、「裏表のあるDesdemona」という嘘を醜悪な社会という真実と共に信じ始めることになる。

Iago. ……………to be bold with you—  
Not to affect many proposéd matches  
Of her own clime, complexion, and degree,  
Where to we see in all things nature  
tends—  
Foh! one may smell, in such, a will most  
rank,  
Foul disproportion, thoughts unnatural.  
……………though I may fear  
Her will, recoiling to her better judgement,  
May fall to match you with her country  
forms,  
And happily repent. (3. 3. 230-40)

更にIagoは、Brabantioと同じように、二人の愛は社会の基準から言って異常な反自然的行為で社会は容認しないという現実をもちだし、先ずOthelloが信じていた二人の愛の社会的正当性という幻想を打破り、そして

Desdemonaをそのような不自然な愛に駁り立てたのは情欲以外に考えられないと嘘を言う。Iagoのこの意図は一応成功し、Othelloは益々強くDesdemonaの虚像を信じていくが、同時に社会における男女の愛は情欲でしかなく、その結果結婚も脆い結びつきだという現実を知っていくことになる。つまりDesdemonaについての嘘が現実社会については真実になる、という奇妙なことになる。

ここで誤解を与えないためにも、Veniceの社会における愛は、醜悪で虚しいものとして劇では示されていることに触れておく必要がある。D. WilsonがShakespeareの作品中、“the strain of sex-nausea which runs through almost everything he wrote after 1600”<sup>12</sup>を認めているように、*Othello*にもOthelloとDesdemonaの美しいプラトニックな愛とは対照的に、社会の露骨でセクシュアルな愛の実態が執拗に繰り返されている。IagoがRoderigoに向かって何度も言う、二人の愛は情欲にすぎぬとの主張は、金をまき上げるためにRoderigoに嘘を言っているという単なるトリックだと思っはいけない。Iagoが腐敗した社会の典型であり、“all qualities, with a learned spirit,/Of human dealings” (3. 3. 261-62)を知っている世間通であることを考慮に入れば、愛を情欲の次元でしか見ない社会の、二人の愛に対する評価を代弁しているに過ぎないと考えるべきではないだろうか。

Iago. It (love) is merely a lust of the blood and a permission of the will.

……………These Moors are changeable in their wills……………

The food that to him now is as luscious as locusts, shall be to him shortly as bitter as coloquintida. She must change for youth: when she is sated with his body, she will find the error of her choice.

(1. 3. 334-350括弧筆者)

少なくとも二人の愛については、社会は、それを反自然であると判断しているのだから、元老院を前にしたDesdemonaの弁明により、それがOthelloの魔法によるのではないとわかった以上、Iagoのように情欲の次元で見たはずなのである。

劇は一方、二組の愛のある夫婦と愛のない夫婦を対照的に示して、社会における愛の不毛を印象づけている。前者は言うまでもなくOthello, Desdemona夫婦で、後者はIago, Emilia夫婦である。IagoとEmiliaはお互いに不信感を抱いていて、二人の愛は冷たくなり、辛うじて夫婦のつながりが保たれているようにしか見えない。Iagoは人前で妻のことを

……………you are pictures out of  
doors, bells in your parlours, wild-cats in  
your kitchens; saints in your injuries,  
devils being offended; players in your  
housewifery, and hussies in your beds.

(2. 1. 109-12)

というように悪態をつき Emilia への不満をもちます。また彼は Othello と Cassio が妻と通じたのではないかと疑っているぐらいだから Emilia を信用していないのは間違いない。一方、Emilia の方も夫に激しい不信をもっていて Shylock を彷彿させる被差別意識を口に出す。そして、女は夫に虐げられて不当な扱いを受けてきたのだから、女だって男のように悪事を行えるのだと暗に女の墮落を示唆している。

Emil. But I do think it is their husbands' faults  
If wives do fall. Say that they slack their  
duties  
And pour our treasures into foreign laps,  
Or else break out in peevish jealousies,  
Throwing restraint upon us; or say they  
strike us,  
Or scant our former having in despite —  
Why, we have galls, and though we have  
some grace,  
Yet have we some revenge. Let husbands  
know  
Their wives have sense like them: they  
see, and smell,  
And have their palates both for sweet and  
sour,  
As husbands have……………  
……………And have not we affections,  
Desires for sport, and frailty, as men have?  
Then let them use us well: else let them  
know,  
The ills we do, their ills instruct us so.

(4. 3. 87-104)

Emilia が Othello, あるいは Cassio と密通をしたかどうかは疑わしいが(四幕二場で彼女は否定している), 彼女のこの言葉は、Shylock の被差別意識が説得力をもっているように、<sup>13</sup> 実に生々しく現実社会の結婚の醜悪さ一夫の暴力、横暴、ひいては女の復讐(不貞)といったものを伝えている。このように二人の間には強い愛はなくて深い亀裂が生じているのは事実であって、その劇的証拠としては、最後の場で Iago がハンカチーフの事実を暴露されたために、残忍にも Emilia を殺害するところをあげれば十分であろう。

また四幕三場には、女の不貞について Desdemona と Emilia が議論をする場面があって、そこで Desdemona は、世界をもらえても絶対にそんな罪は犯さないと言うのに対して、Emilia は世間には不義を働く女は一杯いるし、自分も世界がもらえるならやるだろうと言う。

Des. Beshrew me, if I would do such a wrong  
for the whole world.

Emil. Why, the wrong is but a wrong i'th'world;  
and having the world for your labour, 'tis  
a wrong in your own world, and you  
might quickly make it right.

(4. 3. 79-83)

この議論における二人の意見の相違は非常に象徴的で、絶対価値を認める Desdemona と相対価値を受け入れる Emilia との社会観を明白に對比させている。Desdemona にとって姦通は、世界がどのように変わろうとも絶対悪なのであるが、Emilia にすれば、罪は世界が決めた約束事にすぎず、それ故世界が変わればその価値も変わるのである。Emilia の主張は、彼女自身がそれを信じているかどうかは疑わしいにせよ、社会の女性の声を代弁しており、もはや社会は Desdemona のように不貞、イコール悪のモラルに縛られておらず、従って社会の性道徳が混乱していることを伝えているのは間違いないであろう。

以上のように Shakespeare は社会の性的頹廃、愛の不毛といった問題を背景において、Othello が Desdemona を誤解していく過程でその問題に目覚めていくという工夫をしているように思われる。このように考えれば、

Oth. ……………O curse of marriage,  
That we can call these delicate creatures  
ours,  
And not their appetites! I had rather be a  
toad,  
And live upon the vapour of a dungeon,  
Than keep a corner in the thing I love  
For others' uses. Yet, 'tis the plague of  
great ones;  
Prerogative are they less than the base;  
'Tis destiny unshunnable, like death :  
Even then this forkéd plague is fated to us  
When we do quicken.

(3. 3. 270-79)

という彼の言葉は、決して現実離れた一人よがりの人生解釈、世界認識とは言えないのではないか。Desdemona に関してはこの判断は誤っているにせよ、ここで彼は、Venice というだけでなく普遍的な社会における

愛の不在、結婚の欺瞞、不条理な運命の真理に開眼することになるのではないだろうか。ここにおける一種の世界認識は部分的ではあるけれども、幻想が崩れ醜い現実を知った Lear が最後に到った世界認識と質的には全く同じような気がする。

Lear. When we are born, we cry that we are  
come

To this great stage of fools. (4. 6. 181-82)

両者の認識は、“When we do quicken”と“‘When we are born’”との言葉までが似てるように、この世に生をさずかった人間を待つ社会の運命的な邪悪さ、不条理という点で一致している。このようにして Othello は、Desdemona を誤解するという高価な代償を支払いながら、皮肉にもそのおかげで社会の現実に目覚め、人間の悲惨な運命を悟るといふ地点に達するのである。

この Othello のアイロニカルな発展の見地から Desdemona 殺害の場を検討してみると、しばしば批評家達を戸惑わせている、あの Othello の突然の変化（残忍な態度から崇高な態度への変化）も、それは不自然ではなく論理的な帰結として十分納得がいくものとなる。

Oth. It is the cause, it is the cause, my soul.

.....

Yet she must die, else she'll betray more  
men.

.....

O balmy breath, that dost almost persuade  
Justice to break her sword!

..... I must weep,

But they are cruel tears; their sorrow's  
heavenly:

It strikes where it doth love. (5. 2. 1-22)

Oth. O perjured woman! Thou dost stone my  
heart,

And mak'st me call what I intend to do

A murder, which I thought a sacrifice.

(Ibid. 66-68)

だれもが認めるように、ベッドに寝ている Desdemona を前にして、Othello がとろうとしている態度は裁き人のそれであり、彼は残酷な“murder”ではなく、正義の“sacrifice”のつもりで Desdemona を殺そうとしている。Othello のこの態度に対し、批評家の解釈は大体二つに分かれていて、F. R. Leavis 等、Othello に好意的でない人々は“self-deception”<sup>14</sup>として彼の欺瞞性を批判し、一方19世紀の S. T. Coleridge や A. C. Bradley は正義の士としての Othello を高く評価している。Coleridge は、嫉妬からではなく、“the belief that she, his angel, had fallen from the heaven of her native innocence”<sup>15</sup>から Othello は Desdemona を殺したのだとみているし、Bradley は、

The deed he is bound to do is no murder,

but a sacrifice. He is to save Desdemona from  
herself, not in hate but in honour; in honour,  
and also in love.<sup>16</sup>

と、悪に落ちた Desdemona を救うために殺していると言う。この解釈は作品全体の評価がはっきりしなければ決まるものではないが、論者の説はどちらかと言えば Bradley に近い。つまり、Othello は以上見てきたような世界認識に達した延長上の行為として Desdemona を殺害したのであり、それ故「邪悪な Desdemona」処罰を通して邪悪な社会、世界を正義の名において正しているのだと解釈したいのである。ここで重要なことは、

Oth. An honourable murderer, if you will;

For nought did I in hate, but all in  
honour. (5. 2. 296-97)

とあるように、この世における“honour”を守るために価値なき社会の混乱を罰しようとしているのであって、一人個人を罰しているのではないという点である。

Othello の大きな過ちにおいて一つの救いがあるのは、この社会の倫理的無節操を罰しているという意識が少くとも彼にはあったことである。

## V

次に、誘惑の過程における今一つの問題 — Othello の邪悪化の道 — を考えてみたい。前にも述べたように Othello は、Iago の誘惑によって、Desdemona の虚像を信じ、そして嫉妬に狂い復讐心に燃えたのであり、Desdemona 殺害の動機の一部になっているのが、この復讐心であることは否定できない事実である。殺害に至るまでの Othello の心理は複雑で激しく揺れ動いて、一方では今述べた正義感があり、一方では Desdemona に対する残忍な感情がある。

Oth. I will chop her into messes—cuckold me!

(4. 1. 199)

Oth. Thy bed lust-stained shall with lust's blood  
be spotted. (5. 1. 36)

一体この Othello の猥的レベルへの落下はどう判断すべきか。この問題を考えるにあたっては今一度、Othello と社会との関係を振り返ってみる必要がある。社会を知らなかった Othello は愛を契機に社会に入ろうとした。そして愛を社会の眼で見ようとした。ところが彼の考えていた社会像と現実の社会像は違っていたために、現実社会の愛は Brabantio や Iago が指摘したように人種差別的であり、情欲がその中心をなしていることを見抜くことができなかった。そしてこの現実を知るようになったのは Iago のアイロニカルな教育のおかげであった。問題を解くヒントはここにありそうだ。つまり、不幸にも彼はそのために、現実社会の眼で Desdemona を眺め直してしまい、自ら一時的に、Emilia の不貞で

娼婦する Iago のような現実社会の醜い人間になり下がってしまったのである。換言すれば、彼は社会の泥沼にはまり込んでその男女関係の憎悪の世界に巻き込まれてしまったのであり、社会の邪悪さを知ったがために不幸にもその毒にも触まれていくのである。

Oth. ……………O, now for ever  
Farewell the tranquill mind! farewell  
content!  
Farewell the pluméd troops, and the big  
wars  
That make ambition virtue—O, farewell!  
Farewell the neighing steed and the shrill  
trump,…………  
……………Othello's occupation's gone!

(3. 3. 349-59)

この放浪時代の騎士像的な自己への訣別は象徴的な意味合をもって、彼がロマンスの世界の気高い自己から、汚れた現実社会の一員に移り変わったことを表わしているように見える。Iago が邪推から、妻を寝取った Othello への復讐として彼を嫉妬の地獄で苦しめようとしたように、Othello は Desdemona への復讐として殺害を考える。妻の不貞については共に真実ではないのだが、愛の実態が欲望である社会では、お互いが相手に不信感を持っているためにこうした間違いも起こるのである。その意味では Othello の誤解は、いかにも現実社会の人間にふさわしいものであって、Othello も Venice の人間のように愛を情欲の次元でしか見れなくなった結果ということになる。

この Othello が現実化 (Venice 化) したという事実は、イメージリーの点にもよく表われていて、彼は Desdemona を疑うにつれて劇の前半では Iago によってよく使われる動物的、悪魔的イメージを頻繁に使うようになる。<sup>17</sup> K. Muir はこれを、Iago の嫉妬が Othello に感染していく徴候だと主張しているが、<sup>18</sup> Iago が腐敗した Venice の象徴であることを考慮すれば、それは Othello の社会への同化を示していると考えた方がいいように思える。その例をあげれば、Iago が一幕で二人の愛を動物イメージで

……………an old black ram

Is tuppung your white ewe. (1. 1. 89-90)

というようにセクシュアルにとらえるのと同じように、Othello は四幕で Desdemona の貞節を皮肉って、すぐに孕む夏バエのイメージでとらえる。

Des. I hope my noble lord esteems me honest.  
Dth. O, ay; as summer flies are in the shambles,  
That quicken even with blowing.

(4. 2. 66-68)

また Othello は、社会における情欲の典型は娼婦であるから Desdemona を

O thou public commoner! (4. 2. 74)

I took you for that cunning whore of  
Venice

That married with Othello. (Ibid. 90-91)

というように“whore”にみなすようになる。因に歴史的にみて Venice の娼婦は Elizabeth 朝の英国によく知られている存在だったのであり、<sup>19</sup> この事実を考えれば Venice の社会が性的に頹廃した社会として設定されているのも合点がいく。もっとも Shakespeare は Venice をあらゆる社会の象徴にしているのではあろうが。

世界認識への道は Iago のアイロニカルな手助けがあったにせよ、いわば彼が独自に切り開いた道であるが、残念ながらこの邪悪化 (社会化) の道は第三者の力を全面的に借りなければ阻止できなかった。Emilia は、Othello が Desdemona 殺害の理由として彼女の不貞をあげた時、猛然と反論し事の真相を暴露する。そして Othello は、唯一の証拠であるハンカチーフは Emilia が Iago に与えたものであるのを知り、やっと自らの誤解に気づくのである。

この過ちを悟った瞬間は同時に真の愛を認識する瞬間ともなる。つまり彼は、自分に対する Desdemona の愛は社会における愛の醜い現実 (= 情欲) にあてはまらないものであるのを知り、二人のような純粋な愛は、差別的で汚れた社会の枠を越えてその外でしか成就しないものであることを知るに到るのである。彼は漸く社会という意識から解放されるのだ。

Oth. ……………Then must you speak  
……………of one whose hand,  
Like the base Indian, threw a pearl away  
Richer than all his tribe; of one whose  
subdued eyes.  
Albeit unuséd to the melting mood,  
Drop tears as fast as the Arabian trees  
Their medicinable gum—Set you down this;  
And say besides, that in Aleppo once,  
Where a malignant and a turbaned Turk  
Beat a Venetian and traduced the state,  
I took by th' throat the circumciséd dog  
And smote him —thus. (5. 2. 345-58)

ここで彼が使っている“Indian”, “Arabian trees”, “Aleppo”, “Turk”等の異国的イメージは、彼が今、過去の諸国を流浪して社会を知らなかったロマンティックな自己に再び帰っていることを示唆している。そして社会の外にいた過去の Othello が、社会の中に入りその



毒に侵され大罪を犯した Othello を処罰するという形で自殺をするのである。F. R. Leavis や T. S. Eliot は、これを現実逃避の “self-approving self-dramatization”,<sup>20</sup> “cheering himself up”<sup>21</sup> と呼んで Othello の倫理感の欠如を非難するが、世界悪を認識した Othello が、どうして倫理感がないことがあろうか。K. Muir が指摘しているように彼は、地獄落ちを覚悟して自らに正義の刃を向けているのであり、 (“he excutes justice on himself, believing that his suicide would seal his damnation.”)<sup>22</sup>、それは Desdemona を殺害した時と同じ倫理的態度なのである。と同時にこの自殺は現在の自己を否定して、過去の幻影となった本来の自己を回復する意味をも持っていると言えないか。磯田光一氏が言うように、

自殺とはいうまでもなく「あるべき自己」と「現にある自己」とが一致しない時、後者を殺して、前者を逆説的に証明しようとする祭儀である。<sup>23</sup>  
とするなら死に際のキスは、

Oth. I kissed thee ere I killed thee: no way  
but this,

Killing myself, to die upon a kiss.(5.2.360-61)  
やっと本来の気高くロマンティックな “Othello” に帰った Othello と、最後まで Othello を愛し続けた Desdemona との愛の回復を示していると言えるだろう。そしてこの愛の結びつきの強さは、現実社会の象徴である Iago, Emilia の愛が、最後に無惨に崩れ去るというその脆さによってひときわ強調されるのである。

とは言うものの、この劇が愛の勝利を謳っていると言う気にはなれない。愛は回復すると言っても、それは死の中での回復であり、陽炎のような幻影で、Othello を巻き込んだあの現実の愛の醜悪さの前では青ざめて見えるからだ。それは丁度、Lear の喜びの死<sup>24</sup> が *King Lear* における愛の勝利を告げるものでなく、世界の不条理、残酷さに圧倒される空しい幻であったのと同様である。一体 Shakespeare にとって二人の愛は何だったのだろうか。その存在を信じていたのだろうか、人種の偏見にみちた社会での黒人と白人の愛、反社会的な愛—おそらく、この種の愛は真の愛を表現するのに格好の文学的材料であろうが、彼にとっては所詮、夢の世界のお話でしかなかったのではないか。そもそも Shakespeare にとって現実を考えた時、純粋な愛の持続は考えられなかったのではないか。彼には現実 “this stage of fools” であり、“foul is fair, fair is foul” なのである。どんな絶対的で純粋な愛も徐々に汚れてゆき相対化される。とするなら *Othello* という劇は一種の壮大なメタファーであって、最も困難な状況におかれた二人の完全な愛が、Othello が社会に触まれ現実化することで崩

壊していく過程は、丁度現実社会における愛の持続の不可能の暗喩になっているような気がしてならない。そして現実の愛は不毛であるからこそ、彼は最後に真の純粋な愛を回復させて、それを夢の世界で守ろうとしたのであるまいか。

(注)

テキストはすべて The New Cambridge 版を使用した。

1. J. D. Wilson, *The Essential Shakespeare*, (Cambridge U. P. 1932), p. 124.
2. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, (1904; rpt. Macmillan, 1965), p. 154.
3. *Ibid.*, p. 154.
4. 野島秀勝, “双面神ヤースの祭儀”, ユリイカ, (1975年11月号, 青土社), p. 56
5. Bradley, op. cit., p. 164.
6. cf. Notes of the New Cambridge Shakespeare *Othello*, p. 157.
7. Bradley, op. cit., p. 188.
8. S. T. Coleridge, *Coleridge Shakespearean Criticism*, ed. T. M. Raysor, (Everyman's Library, 1960), p. 44.
9. F. R. Leavis, *The Common Pursuit*, (Chatto & Windus, 1952), p. 138.
10. 高橋康也, 道化の文学, (中央公論社, 昭和52年), pp. 118-120.
11. W. Empson, *The Structure of Complex Words*, (1951; rpt. The University of Michigan P. 1967), p. 224.
12. J. D. Wilson, op. cit., p. 118.
13. cf. *The Merchant of Venice*, 3. 1. 49-67.
14. F. R. Leavis, op. cit., p. 149.
15. S. T. Coleridge, op. cit., p. 113.
16. Bradley, op. cit., p. 161.
17. S. L. Bethell, “Shakespeare's Imagery: The Diabolic Images in *Othello*.” *Shakespeare Survey* 5, p. 69.
18. K. Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence*, (Hutchinson U. Library, 1972), p. 114.
19. Bethell, op. cit., p. 72.

The cunning whores of Venice were well enough known to Elizabethan England: “the name of a Cortezan of Venice is famous over all Christendom”, says Coryate in his *Crudities*. An Elizabethan audience might have

- expected fickleness in her, not chastity.
20. Leavis, op. cit., p. 142.
21. T. S. Eliot, "Shakespeare and the Stoicism of Seneca", *Shakespeare Criticism* 1915-35, ed. Anne Ridiler, (Oxford U. P. 1936), p. 214.
22. K. Muir, op. cit., p. 100.
23. 磯田光一, "「悲劇の条件」", ユリイカ, 1975年11月号, p. 50.
24. Do you see this? Look on her! Look—her lips! Look there, look there!  
(5. 3. 310-11)  
cf. Notes of *King Lear* p. 275.  
Lear dies of joy, being 'sure, at last, that she *lives*' (Bradley, p. 291).